

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 井上 美代江 |
| 学位の種類 | 修士 (看護学) |
| 学位記番号 | 修士 第 141 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 22 年 3 月 25 日 |
| 学位論文題目 | 老年看護学実習 (介護老人福祉施設) において看護 学生が要介護高齢者へ関わる過程の研究 |

論 文 内 容 要 旨

| | | | |
|--|---|---------------|--------------------|
| ※整理番号 | 141 | (ふりがな) 氏 名 | いのうえ みよえ 井上 美代江 |
| 修士論文題目 | 老年看護学実習（介護老人福祉施設）において看護学生が要介護高齢者へ関わる過程の研究 | | |
| <p>【研究目的】 老年看護学実習（介護老人福祉施設）において、看護学生（以下学生とする）が要介護高齢者（以下高齢者とする）と関わる過程を明らかにすることである。</p> <p>【研究方法】 研究対象は、研究協力の承諾を得た看護系大学の学生6名とし、研究方法は、質的帰納的研究である。データ収集は、実習場面の参加観察（実習の初日、3日目、5日目）と学生への面接である。分析は、参加観察と面接および学生の実習記録を統合して逐語録とし、学生ごとにプロセスレコードとした。さらに、学生ごとに要介護高齢者へ関わる過程の特徴を整理して、各学生の関わりの過程をパターン化した。</p> <p>【結果】 学生6名が高齢者8名に関わった過程（2日以上に関わりを選定）は、11事例であった。初日から最終日までの関わりは4事例、初日から2～3日の関わりが4事例、初日と4～5日の関わりは3事例であった。学生の関わりの過程は、初日には戸惑いを感じていたが、その戸惑いを契機にして高齢者への関わりを模索し、看護の視点から高齢者へ主体的・意図的に関わっていった。さらに、これらの事例について、学生と高齢者との関わりの過程の共通性を抽出した結果、1) 高齢者の残存能力に働きかけた関わり、2) 高齢者との人間関係を重視した関わり、3) 高齢者の生活行動を重視した関わり、4) 高齢者の健康的な反応を引き出した関わり、5) 高齢者の感情を重視した関わりの5パターンに分類された。</p> <p>【考察】 以上の結果から、短期間の老年看護学実習の指導では、実習初期に戸惑っている学生が思いを表出できる環境の調整や指導者間の連携をはかること、高齢者を主観的、客観的情報から理解できるように指導し、学生を見守ることが大切であると考え。また、5パターンのうち、1)のパターンでは、初期に、高齢者との関わりから得た主観的情報と施設記録等の客観的情報を統合し、高齢者の残存能力に働きかけていた。また、2)、3)、4)、5)のパターンと1)のパターンの比較では、学生が、受け持ちでない場合や受け持ちでも生活援助が少ない高齢者の生活援助を実施しており、関わる期間が短く、人間関係は発展しても看護過程の展開に至らない場合もあるので、学生の思考過程を十分に確認し、学生が主体的に看護援助を判断できるように指導することが大切と考える。</p> <p>【総括】 本研究の結果、学生が高齢者と関わる過程は5パターンであった。どの学生も初日には戸惑いを感じていたが、戸惑いを契機として高齢者へ主体的・意図的に関わっていた。短期間の老年看護学実習（介護福祉施設）における実習指導では、学生の戸惑いを大切にして、学生が関わりの意味や方向性を見出すことができるように見守る支援が大切であると考え。</p> | | | |

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。